

エ 病害虫防除法（ソリダゴ）

（ア）青枯病 *Ralstonia solanacearum*

（防除のねらい）

病原菌はナス科などを侵す多犯性。土壌中では数年間生存する。高温時に発生が多い。多湿土壌、窒素過多ほ場や根の損傷・線虫の発生などで発病しやすい。根を健全に保つことが重要。

（耕種的防除法）

- （1）石灰を多量に施し、排水をよくする。
- （2）必ず残渣処理を行う。

（イ）菌核病 *Sclerotinia sclerotiorum*

（防除のねらい）

まれに発生する。低温寡日照条件で発生しやすい。被害部に菌核を生じ、土中に落ちて次の伝染源になるので伝染源を断つようにする。植え替え時に土壌消毒を行う。また、病原菌は多犯性で、雑草防除等にも留意する。

（耕種的防除法）

キクの項参照。

（ウ）白絹病 *Sclerotium rolfsii*

（防除のねらい）

土壌伝染し、立枯症状を呈する。菌核は土中に生存するので連作ほ場は発病が多くなる。菌核は落ちやすいので、菌核形成前に被害株を取り除いて伝染源を少なくすることに努める。連作するときは土壌消毒を行う。

（耕種的防除法）

ユリの項参照。

（エ）根頭がんしゅ病 *Agrobacterium tumefaciens*

（防除のねらい）

土壌伝染性細菌で連作地に発病が多く、県内の各産地で確認されている。傷口から侵入し、切り株あとの地上部や生育初期の地上部に発生する。発病してからの防除は難しいので、病原菌を持ち込まないようにする。苗木導入にあたっては特に留意する。

（耕種的防除法）

- （1）健全土壌に健全苗を植付ける。
- （2）被害株は土壌とともに除去する。
- （3）発病ほ場では連作しない。

（オ）さび病 *Coleosporium solidaginis*

（防除のねらい）

病原菌はセイタカアワダチソウのさび病菌と同じで、ほ場周辺のセイタカアワダチソウで発生すると伝染源になる。夏孢子で感染し、25℃前後が適温である。風が強く雨天曇天が続くと次々と感染する。発病してからの防除は難しいので、発生初期の防除が重要。また、広域での防除が望ましい。

（耕種的防除法）

- （1）無病苗を移植する。
- （2）ほ場周辺雑草を除去する。

（カ）灰色かび病 *Botrytis cinerea*

（防除のねらい）

施設栽培で低温過湿状態が続くとまれに発生する。生長点に近い葉は腐敗症状を呈し、茎に発生すると細く立ち枯れる。

（耕種的防除法）

ストックの項参照。

(キ) アブラムシ類

(防除のねらい)

セイタカアワダチソウアブラムシなど数種のアブラムシが寄生する。新芽や蕾などの生育を阻害するとともに、排泄物により葉の汚れをおこす。初期防除に重点を置き、同一薬剤の連用は避ける。

(ク) ハスモンヨトウ

(防除のねらい)

(耕種的防除法) } キクの項参照

(ケ) マメハモグリバエ

(防除のねらい)

県本土では5～6月および9～10月、奄美地域では4～5月および10～11月に発生が多い。薬剤に対する感受性が低く、多発してからは効果が劣るので初期防除に努める。

(耕種的防除法)

- (1) 発生源となる周辺の雑草、収穫後の被害残渣は除去する。
- (2) 施設の換気部、出入り口には寒冷紗を設置し、成虫の侵入を防ぐ。
- (3) 施設では黄色粘着シート等を設置し成虫を誘殺する。

(化学的防除法の注意事項)

- (1) 多発時には3～5日おきに2～3回散布する。
- (2) 同一薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。

(コ) ハダニ類

(防除のねらい)

ナミハダニ、カンザワハダニが主体であるが、奄美地域ではナンセイハダニも寄生する。ハウス栽培では周年発生し、高温乾燥条件で多発生する。早期発見・初期防除に努める。